

# 17、18世紀フランスにおける 奢侈と医療行為としての清潔

—白い下着類と入浴の表象—

Cleanliness as a Medical Practice and Luxury  
in 17th and 18th Century France

—Symbols of White Undergarments and Bathing—

内村理奈  
Rina UCHIMURA

## Abstract

Cleanliness in 17th and 18th century France was achieved by wearing white undergarments and changing them frequently. Because recurring plagues had instilled in people an extreme fear of water, water did not factor into people's concept of cleanliness, and the sole determining factor of one's cleanliness was whether or not one had white undergarments. Because the changing of undergarments to maintain physical cleanliness itself was associated with a new sense of pleasure which began at that time, it was perceived as being a practice that was also seen as a form of luxury. For example, preparing a change of chemises was considered the highest form of hospitality for a guest. A change of undergarments was also the principal treatment for illness. In this way, white undergarments became a symbol integrating luxury with physical hygiene and medical care, and that transition in meaning is deeply related to the symbol of bathing.

## 1. 序

本論では、アンシャン・レジーム期に形成された清潔表象について論じる。アンシャン・レジーム期の礼儀作法の中で、清潔は作法の根幹に関わるテーマであるが、今日における清潔とはまったく似て非なる概念が、当時の清潔には見られた。なぜなら、17世紀の清潔概念に、水はまったくといっていいほど介在せず、清潔の実現はもっぱら白いリネン類によって得られたからであ

る。清潔感という身体感覚は、水を介さずに、衣服とりわけ白いリネン類という下着によって感じ取られていた。なぜ白いリネン類によって清潔が実感されてきたのか、またなぜそれほどまでに白いリネン類がもてはやされたのか、実際白いリネン類がどの程度身に着けられていたのか、また白いリネン類とはどのような技術に支えられて手に入れられたものなのか、などの問題関心から、筆者はこれまで論証を重ねてきた<sup>(1)</sup>。その過程で、白いリネン類は、身分表象としての役割を果たしていたこと、白さとはきわめて貴重なものであったこと、当時の清潔とは社会の身分階層を如実に反映しているものであることなどが明らかになった。これらの論考の中で、筆者は当時の清潔の意味において、「汚れない」とは二次的な概念であり、フランス語の清潔は、本来「身分にふさわしく身なりを整えること」であった点を、強調して議論を展開してきた。つまり、礼儀作法の中で重視されてきた当時の清潔は、基本的に礼儀作法なのであり、今日考えられているような身体衛生とは少し離れた概念であることに着目してきたのである。とはいえ、17世紀の清潔に、まったく身体衛生の概念が含まれないわけではない。そこで、本論ではこれまで筆者があえて切り離して考えてきた身体衛生という観点から、アンシャン・レジム期の清潔について捉え直してみたい。白いリネン類、下着類は、アンシャン・レジム期において清潔の唯一の表象であるといっても過言ではなく、そこには、奢侈の表象と、身体衛生とくに医療行為の表象が、重なって存在している点を明らかにしたい。

## 2. 清潔 (propreté) 論研究史

17世紀の文法家クロード・ファーヴル・ド・ヴォージュユラ (Claude Favre de Vaugelas, 1585-1650) は、当時、用法が混乱していた多くのフランス語の整理を行なった。1647年のことである。彼が意味と表記を正した多くの言葉の中に *propreté* と *propriété* が含まれている。現代では、*propreté* は「清潔」、*propriété* は「所有、特性、属性」という意味を持つが、この二つは17世紀初期においては、意味と表記に混同が見られた。どちらも形容詞 *propre* との関わりが深い。

ヴォージュユラは当時新しく生まれた概念の「清潔」は、もっぱら *propreté* の語で表すべきであるとして、次のように述べる。

*propriété* はラテン語の *proprietas* を意味するのにふさわしい。しかし、衣服や家具、その他のいかなるものでも、それをきれいにしたり、礼儀正しく整えたり、装飾したりする気配りのことを意味するものではない。これは *propreté* と言うべきであり、*propriété* ではない<sup>(2)</sup>。

## 17、18世紀フランスにおける奢侈と医療行為としての清潔

それというのも、この二つの語は語源が異なり、propriétéは「独自性、所有権」を意味するラテン語のproprietasから、propretéはフランス語の形容詞プロプルから生まれたからだと説明する。propretéの語源であるpropreは生粋のフランス語であり、「きれいな（汚れない）」net、と「ぴったり合った」ajustéという意味を持っている。ヴォージュラは、「きれい」で「ふさわしく適切」で「礼儀正しい」状態はpropreであるが、これはすこし凝った言い回しであると言う。そして、このような意味においては、propretéを使うべきだと述べる<sup>(3)</sup>。つまり、この時代に新しく登場した概念「清潔」propretéは多少気取った言い回しであった。

propretéを「清潔」と訳すと、そこには自ずと衛生感をともなう響きが含まれてくる。しかし、propretéは、きれいで汚れない状態を含意するものの、ヴォージュラが正しているように、「特性」や「属性」という意味をもつpropriétéと混じりあって存在していた。つまり、17世紀フランスにおける<sup>プロブルテ</sup>清潔は、現代人の考える<sup>プロブルテ</sup>清潔とは異なる世界を持っていた。本論で問題とする<sup>プロブルテ</sup>清潔は、「汚れない」、「ぴったりあった」、「ふさわしい」、「礼儀正しい」、「装飾してある」さらには「属性」という意味の総体なのである。

しかし、アンシャン・レジーム期の清潔をこのような複合概念として正しくとらえて論じたものは少ない。清潔論は衛生論に近い内容で発展してきた。

最も古い清潔論はアルフレッド・フラン克蘭によるものであろう<sup>(4)</sup>。『13世紀から19世紀までの作法とエチケットとモードと良き趣味』（1908年）の第1巻において清潔論を展開した。清潔（propreté）を礼儀作法（civilitéé）における筆頭のテーマと位置づけて、第1章を割り当て、内容としては衛生問題の歴史を13世紀から時代を追って論じている。彼の代表作『昔の私生活』シリーズには「衛生」hygièneの巻（1890年）があり<sup>(5)</sup>、これを概括した内容でもある。清潔であることは身体に関心を持つことにつながり、したがって官能主義と結びつくため、中世におけるキリスト教は長らくこれを拒んできたのだという指摘から始まり、一方で蒸し風呂屋で客をもてなす文化の存在や、髪の毛や歯のケアの変遷や、他人に不快な思いをさせないという観点から生まれた洩のかみ方などのエチケット、近世になって床屋外科医（barbier-chirurgien）の医療行為がしだいに制限されていく過程や、風呂屋の話、トイレの話等について、時代を追って述べている。清潔感とリネン類の関係を示唆している部分もある<sup>(6)</sup>。

オギュスタン・カバネスの『過去の私的な生活習慣』（1922-24年）もフラン克蘭と同様の関心にもとづいて、一部を過去の衛生問題に割いている<sup>(7)</sup>。第1巻では、鼻や髪、口や手の衛生問題、とくに洩のかみ方や口のゆすぎ方、歯の衛生（つまり歯ブラシについて）、さらに家屋や街路の都市の衛生問題を扱っており、第2巻は世界各国の風呂の歴史になっている。第1巻の目次を見ると、清潔（propreté）と衛生（hygiène）の語が同程度に現れており、両概念を同等の「衛生」概念で捉え、論理展開している。つまりここでも身体と公衆の衛生史になっていると言ってよい。

このように19世紀末から見られる清潔史研究において、それが衛生問題として語られてきた

背景には、19世紀の社会事情が関係していると思われる。1575年に初めて「衛生」(hygiène)という語が生まれ<sup>(8)</sup>、長らく健康を維持増進するための医学的処置のことを指していたが、19世紀になって、現在考えるような健康状態を維持するために役立つ装置あるいは知識の集大成を意味するようになり、あらためて「衛生」問題は注目されてきたからである。衛生学が誕生するのが19世紀であり<sup>(9)</sup>、フラン克蘭とカバネスの著作は、19世紀に生まれたこの衛生観に基づく関心の上に立って、過去の清潔を論じている。

おそらく19世紀の人びとにとって、17世紀の衛生状態の極度に未発達な様子が、一種の好奇の対象となっていた。19世紀人にとっての *propreté* と17世紀人にとっての *propreté* はあまりに乖離していた。その点に対する知的関心が、過去の衛生問題を学問的に跡付ける契機になったろう。というのは、17世紀の礼儀作法書、シャルル・ソレル Charles Sorel (1582?-1674) の『ギャラントリーの法則』(1644)が19世紀に再版された際、編者のルドヴィク・ラランヌ Ludovic Lalanne (生没年不詳) は、序文の中で、19世紀から見た17世紀の衛生状態はあまりに未熟な段階にあると指摘し、驚きを禁じえないと述べているからである。彼はバルザック Honoré de Balzac (1799-1850) の『優雅な生活論』(1853年)<sup>(10)</sup>と比較しつつ次のように述べた。

彼 [バルザック] にとって、エレガンスとは肉体と精神の双方に関わるものであるが、その先駆者は、X先生 [ソレル] も言うように、足元から頭の上まで飾り立ててはいるのだが、ほとんどケダモノのようである。とりわけ、11ページで17世紀の作者がおこなっている忠告は、我われの時代の優雅な人士にはあまりに奇異なものに映る。「時折からだをキレイにするために風呂屋にいきなさい。毎日石鹸で手を洗いなさい。同様にしばしば顔を洗うべきです。」など。これらの奇妙な教えは今日では母親が小さな子どもに与えるものだ<sup>(11)</sup>。

このように指摘した上で、ラランヌは、16世紀後半から17世紀前半にかけてのフランスでは、相次ぐ戦乱の影響で、清潔の習慣が廃れてしまったのだと嘆く<sup>(12)</sup>。ラランヌの言う清潔とは、したがって衛生問題に絞られている。ラランヌは19世紀において当たり前となっている清潔観をもとに、17世紀にはそれが欠如していることを素朴に慨嘆しており、17世紀の清潔が19世紀のそれとは趣の異なる概念であったことには気付いていない。

しかしいずれにせよ、19世紀人にとって奇異なものに映った17世紀の清潔・衛生状況は、学問的な関心の的になりえた。20世紀になってからも同様に、衛生問題の歴史は研究者の関心を引き続けた。たとえば、洩のかみ方とハンカチーフの普及の道のりに、同じく衛生観念の変化を見たのは、社会学者エリアスの『文明化の過程』(1969)である<sup>(13)</sup>。

この流れの延長線上に、ジョルジュ・ヴィガレロをはじめとする1980年代以降に現れたいく

つかの論考が存在する。まずヴィガレロによる『清潔になる〈私〉—身体管理の文化誌』（1985）は清潔の内容そのものを時代に即して捉えなおし、これまでの清潔論に一定の進展を見せた<sup>14</sup>。その結果、propreté を衛生の装置と見なすのではなく、身体と外見をいかに整えるかという礼儀作法上の問題として捉え、邦訳の表題にある通り身体管理の観点から論じたものになっている。具体的には、近世とりわけ 17 世紀における清潔とは、ペストの流行を恐れるあまり、水を介さないものとなって、白い下着類（つまりリネン類）を取り替えることによって、清潔が維持されたのだという画期的な指摘を行った。当時の人びとの身体感覚としての清潔が明解に描き出されたのである。

ネド・リヴァルの『清潔と身体管理に関する逸話的な歴史』（1986）は、見開き部分の表題において、「洗濯と身体管理の歴史」（*Histoire anecdotique du lavage et des soins corporals*）、とも記されている通り、清潔の問題の中でも、とりわけ洗濯と漂白の歴史を、多くの文献を渉猟して、大きな時間的流れの中で跡付けたものである<sup>15</sup>。ヴィガレロの論も援用し、身体管理・衛生の分野にも言及しているが、洗濯をめぐる社会事情、洗濯女の風俗などを古代から現代にかけて概観しているのが興味深い。洗濯に関する歴史叙述は他に見られないため、この点が評価されるべき成果であろう。

以上のように、これまでの清潔（propreté）論は衛生観念の歴史、身体管理と公衆衛生の歴史の文脈の中で語られ発展してきた<sup>16</sup>。過去の時代における現代と異なる清潔の様相が、どのように変遷し今に至っているかが論じられてきた。唯一ヴィガレロは、対象とする時代における「清潔」の概念を捉えなおそうとした。したがって筆者の清潔論はヴィガレロの成果を出発点としている。

しかし、ヴィガレロもやはり、現在の清潔観が形成される道筋に主たる関心があったと思われる。言い換えるならば、彼の論じた 17 世紀の白い下着による清潔とは、現代の水を必要とする清潔観のいわば代替物としての位置づけがされている。清潔の概念を当時の意味に即して論じているように見えながら、実は、現代の衛生観を根拠に、それに替わるものが何であったかを論じているため、当時の清潔の意味を十分に吟味し尽くしていない。したがって、現代の概念を過去に投影するアナクロニズムに陥っている側面が否めない。

とは言え、これまでの清潔論が、現在に至る衛生観念の道程を描いてきたこと自体には意義があり、大きな成果を見たと言える。しかし、アンシャン・レジェーム期に限って言うならば、当時の清潔（propreté）には、衛生的な側面のみならず、より広範な意味が色濃く投影されていた。それを虚心坦懐に見直さなければ、当時の清潔の真意を掴むことはできない。現代人の知る清潔とは異なる世界が、アンシャン・レジェーム期の清潔にはある。

これらの点を念頭に置き、筆者はこれまで礼儀作法の側面から研究をおこなってきたが、その上で、本論では、今一度、身体衛生の観点から考察する。当時の清潔に衛生的な概念がまったく

欠如していたわけではないことを明らかにし、アンシャン・レジーム期の身体衛生とはいかなるものであったのか、その意味を探ってみる。

### 3. 清潔 (propreté) の意味

本論で言う「清潔」とは *propreté* のことである。*propreté* は 16 世紀頃にフランス語の *propre* から派生した言葉である。*propre* は「そのもの自身に属しているもの、他のものと共有しないもの、特色、適切である、安定している」という意味のラテン語 *proprius* から生まれた言葉とされる<sup>77)</sup>。したがって *propre* は *appartenance* 「そのもの自身に属しているもの、他のものと共有しないもの」と *convenable* 「ふさわしい、適切である」という概念を基本としている。大部分の仏語辞書が、第一にこの 2 つの語で *propre* を説明する。この本来 *propre* の意味に含まれていた「適切である、ふさわしい」という概念が「自らの属性に適切であり、ふさわしい外観に整えてある様子」に変貌した。そして 16 世紀には *propre* の語に「身だしなみの良い、優雅な、エレガント」、「豪華な、贅沢な」という意味が加わる<sup>78)</sup>。そこに「清潔な」という意味が加味されるのは、17 世紀初頭まで待たねばならない。それでもやはり、たとえばユゲ Edmond Huguet (1863-1948) の『17 世紀古語小辞典』(1920) によれば、*propre* は *élégant*、*propreté* は *élégance* を意味し<sup>79)</sup>、17 世紀において *propreté* の意味は多様な色調を帯びて存在していた。

また、上述のとおり、*propre* の本来の意味に近い言葉で、*propreté* よりも発生が古い語として *propriété* がある。したがって基本的には *propriété* も「属性」という意味を表している。そして *propre* のたどった経過を *propriété* も同様にたどったのであろう。*propre* から派生した *propreté* と *propriété* はどちらも同じ内容を持つに至った。現代では *propriété* は「所有物、特性」、*propreté* は「清潔」という概念でもっぱら用いられており、明確な相違があるが、16 世紀から 17 世紀前期にかけてはこの両者は区別なく用いられていた。ユゲの『16 世紀フランス語辞書』によれば、*propreté* と *propriété* の意味は、両者とも *élégance* 「優雅さ、礼儀」になっている<sup>80)</sup>。

17 世紀になっても、たとえば、ニコラ・ファレ Nicolas Faret (1596?-1646) の作法書『オネットム、すなわち宮廷で気に入られる術』(1630) では、明らかに、*propreté* と *propriété* が同様の意味で用いられ、二つの語が版によって混同している箇所がある<sup>81)</sup>。「男性の *propreté* について」という節の中で、1630 年、33 年、39 年の版では *propreté* となっているのだが、36 年版は *propriété* と記されている。内容は「清潔 (*nettement*) でありさえすれば、豪華であるかどうかは重要ではない」という一文からもわかるように「清潔」に関して述べた箇所であるから、*propreté* と表記されるべきである。この時期に 2 語が混同されていたことを示す好例である。

そこで上述のとおり、17 世紀の文法家ヴォージュラは『フランス語覚え書き』(1647) の中で *propreté* と *propriété* の違いを明確にし、このふたつの言葉の混乱を正した。ヴォージュラは

propreté を「汚れない」概念を表すものとして新しく定義したのである。

このようにヴォージュラは、propriété も言い得ていた内容を propreté の意味として限定した。propreté は形容詞 propre の「汚れない」や「整えられた」意味を担うのであるが、以上の経緯から propreté が単なる「汚れない状態」と言いきれない概念であることは確かだ。繰り返すが、17 世紀に誕生したプロプルテは「清潔、汚れのなさ」、「ふさわしさ」、「礼儀作法」、「優雅」、「装飾」など複数の意味の総合概念なのである<sup>23</sup>。以上を踏まえた上で、本論では、17 世紀に、この語の意味となった「清潔」概念の内容に焦点を当てるため、「清潔」の訳語を用いる。

#### 4. 17 世紀の清潔概念

このように、17 世紀は清潔概念が誕生した時期である。この時代において清潔の問題は、常に礼儀作法と分かち難く結び付き、主として白いリネン類つまり下着を身につけているか否かで判断された。歴史家ジョルジュ・ヴィガレロによれば、当時の清潔観から水は遠ざけられており、白い下着によって、身体は洗われていたのであった<sup>23</sup>。このように水が忌避されたのは、フランス国内各地がしばしばペストの災禍に見舞われたからである<sup>24</sup>。当時、水はペストなどの病原菌を運ぶ恐ろしいものと考えられており、しかも、水は簡単に皮膚の小さな穴を通過して身体の中へ入り込んでくると思われていた。下水道の整備が整っていないアンシャン・レジーム期においては、水そのものがパリなどでは汚染されていた。その上、水に対して肉体はあまりに脆弱で、それゆえ水に触れ合うことは特別な場合を除いて危険視されたのである。これはおそらく、17 世紀においては、基本的な身体に関する知識が一般に欠如していたことにも起因する<sup>25</sup>。実際には中世まで続いていた入浴の習慣は、このような新たな身体表象の形成、つまり恐ろしい水の前であまりに脆い身体というイメージと、一種の秘密の社交場である公衆浴場の風俗を社会が許容できなくなったことにより、ほぼ消滅していた。そのような状況のもとで、唯一、身体を清浄に保つことができたのは、白い下着を身につけ、それを頻繁に取り替えることであった。17 世紀においては、水ではなく、白い下着によって清潔が実現されていたというのが、ヴィガレロの論であり、各種の作法書の言説に照らして、筆者もこの点は同様に考える<sup>26</sup>。

清潔な身体を保つための白い下着の着替えは、それ自体が当時誕生した新しい快の感覚と結びつくがゆえに、奢侈の範疇の行為でもある。したがって、当時の身体衛生とは万人が共有できるものではなく、恵まれた人々のみが享受できる、極めて贅沢な医療行為の側面があり、白い下着とは、その優れた表象となっていた。

白い下着による清潔表象の確立において、当時の人々の水に対する感性、特に、入浴に対する感性の変化は、常に連動している部分がある。入浴も本来、健康増進や病人に対しての施療である側面が強く、それが 18 世紀になって、貴族の新しい気晴らしへと発展していた。白い下着と

入浴の表象は、当時の人びとの水をめぐる感性と医学知識の変化とともに変貌したと言えよう。

## 5. 白い下着 (linge) とは

本論で言う白い下着とは白いリネン類 (linge) のことである。linge は、フルチエール Furetière (1655-88) によれば、肌に直接身につける麻や亜麻布類と家庭で使う布類の総称であり、広範な種類に及ぶものであった<sup>27)</sup>。布とは toile であり、麻や亜麻や木綿の白い平織りの布を指す。広く一般的に用いられたのは麻で、亜麻布は上等品であった。これを裁断、製品化して売買したのが、下着製造販売業者 (lingère) である。下着製造販売業者が扱った全ての品を linge と総称できる。

フルチエールは次のように続ける<sup>28)</sup>。linge は gros linge と menu linge に分類できる。前者はシャツ (draps)、ナプキン類 (serviettes, nappes)、シュミーズ (chemises)などを指し、後者は襟飾り (rabats)、カフス (manchettes)、クラヴァット (cravates)、ハンカチーフ (mouchoirs) などの小物を指した。また前者は洗濯女 (blanchisseuse) に、後者は洗濯糊付業者 (empeseuse) に洗濯を頼んだ。洗濯糊付業者とは、16世紀以降、特に襷襟 (fraise) のひだ付けを行なった専門家のことを指している<sup>29)</sup>。さらに、linge uni はレースのついていない白無地のリネンであり、beau linge (美しいリネン類) はレースのついているものを指した。したがって、ニコラ・ファレが作法書で言う清潔に不可欠な beau linge とは、レース付きの美しいリネン類を指している<sup>30)</sup>。

下着製造販売業者の取り扱う商品は多岐にわたる。1723年に出版されたジャック・サヴァリー Jacques Savary Des Bruslons (1657-1716) の『商業辞典』によれば、下着製造販売業者が扱う商品は以下の通りである。

亜麻布、麻布、バティスト布、リノン布、カンブレイ布、オランダ亜麻布、カヌバス布 (地の粗いものから細かいものまで)、ズック布 (白から黄色まで)、そしてあらゆる布製品、シュミーズやカルソン、ラバやその他これらの布に関わる製品<sup>31)</sup>。

この最後の「これらの布に関わる製品」という部分が、拡大解釈されつづけて、下着製造販売業者はレースも取り扱っていたのであった<sup>32)</sup>。

バティスト布<sup>33)</sup>、リノン布<sup>34)</sup>、カンブレイ布<sup>35)</sup>はいずれも上質の白い亜麻布で、フランスの北部の近隣地域で作られていた。しかし、上質で繊細な亜麻布ばかりではない。中にはカヌバスのような粗布<sup>36)</sup>も白いリネン類に含まれる。このように、さまざまな亜麻布と麻布を用いた製品が linge であった。

下着製造販売業者は13世紀頃から続く伝統的な女性の職業である。見習いになれるのは未婚



女性と限られていた。見習い期間は4年間、さらに2年間は店員として働かなければ女性親方になれず、身元が確かで、敬虔なカトリック信者であることが条件とされた<sup>97)</sup>。この条件は1645年1月3日に打ち出された下着製造販売業者の組合<sup>コミュニテ</sup>の規約に記されたものであるが、1723年刊行のサヴァリーの『商業辞典』においても、この規約を最新のものとしている。下着製造販売業者の女性親方は1725年の時点で659人いた。その後も増減は見られず、73年も79年も同様であったという<sup>98)</sup>。したがって、17世紀から18世紀にかけて、下着製造販売業者の仕事に大きな変化はなかったと考えられる。

1771年に科学アカデミー会員のガルソー François-Alexandre-Pierre de Garsault (1693-1778) が著した『下着製造販売業者の技術』(1771年)によると、下着製造販売業者の仕事内容は、亜麻、麻、木綿の布を扱うこと、それらを製品に合わせて *aunage* という採寸、裁断を行なうこと、さらに製品を作り販売することであった。下着製造販売業者が注力する仕事は、女性の人生におけるふたつの大きな節目、結婚と出産のときに必要な布類をそろえることである。もうひとつの重要な仕事は、キリスト教会に納めるさまざまな白い布類をそろえることであった。女性の結婚と出産に必要な白い布類とは、かぶりもの、化粧着、肩掛け、シーツ、枕カバー、おくるみ、乳児用のかぶりものなどであり、教会に納める布類とは、祭壇布や聖体布などの布類、祭服、かぶりもの、肩掛けなどであり、これ以外の商品としては、さらに男女共に身につける肌着のシュミー

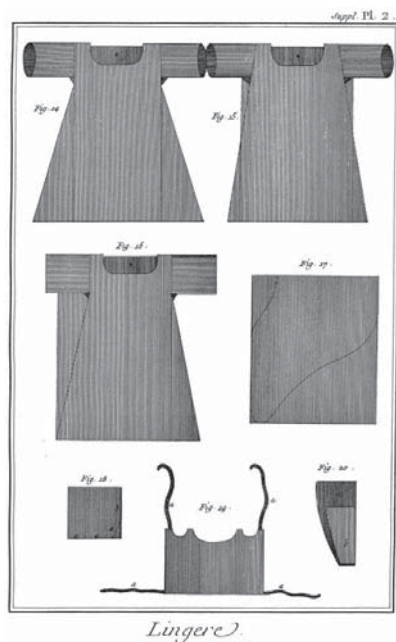


図1. 下着製造販売業者が商う chemise

DIDEROT & D'ALEMBERT, *Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, Paris, 1751-1780, (Friederich Frommann Verlag, Stuttgart, 1966) より。

ズ(図1)や、襟飾り、カフスなどを商っていた<sup>39)</sup>。これらすべてが linge と呼ばれる白いリネン類であり、美しい白いレースが付属しているのが常であったため、亜麻の白糸レースに限っては、下着製造販売業者が商うものとされた。つまり linge はレースを含む。したがって、本論で用いる「白い下着」という語は、白い亜麻布や麻布から精緻な上等のレースなど亜麻糸による手工芸品までを含む広範な白い布類を指している。清潔の表現に不可欠とされた白い下着は、これらのうち、人が身につけるものすべてである。

## 6. 水で体を洗わない

すでに述べているように、17世紀は身体を水で清潔にするのではなかった。身体の汚れを落とす際に、水を用いずに済ませていた様子は、たとえば、ルイ13世の侍医であったジャン・エロアール Jean Héroard (1551-1628) の日記を見ればよくわかる。王太子として誕生したルイ13世の健康に最大の注意を払い、エロアールは当時の最新の衛生・医学知識に基づいて、王太子の身体管理に配慮し、その様子を詳細に記録した。その内容は当時の清潔・衛生事情を明かすものとなっている。

まず、1601年9月27日に誕生したルイ13世は、産湯ではなくワインと油で身体を洗われたのであった。

私は王太子の全身を油の混ざった赤ワインで洗った。そして頭も同じワインとバラの香りを付けた油で洗った。身体を拭い、産着でくるんで、おくるみに仰向けに寝かせた<sup>40)</sup>。

ワインと香油で身体を洗ってもらった新生児ルイ13世は、約1ヶ月半たった同年11月11日に、初めて頭をこすってきれいにしてもらった<sup>41)</sup>。同年11月17日には、はじめて新鮮なバターとアーモンド油で額と顔の垢を落としてもらっている<sup>42)</sup>。さらに、はじめて髪の毛を梳かしてもらったのは、翌年1602年7月4日のことである<sup>43)</sup>。そして足をぬるま湯で洗ったのは、ようやく5歳になったときであった。

1606年10月3日、ぬるま湯で王太子の脚を洗った。初めてのことであった<sup>44)</sup>。

この日まで、ルイ13世は一度も水を用いて身体を洗われたことはなかった。風呂に入ったのは7歳になる年、1608年8月2日のことである<sup>45)</sup>。

このように、フランス王国の王太子の身体でさえ、水を用いて汚れを落とすことはめったに行なわれなかった。1606年5歳になるまで、一度もルイ王太子の身体は水に触れていない。

## 7. 医療目的の入浴

それでも、大貴族は医療目的で入浴することもあった。たとえばルイ14世は、侍医団の判断によって、1658年、マラリアと目される病気の治療の一貫として入浴したことがある<sup>(46)</sup>。7日間静養した後の最終的な医師の判断であった。その際、医学的見地から周到的な準備がなされ、おそらく水自体も特別なものが用意され、水が体に浸透して水ぶくれにならないように、前日には浣腸と下剤が処方された。侍医は次のように記録している。

私は日曜日の朝に翌日王を入浴させるための下剤を準備させた。この薬は王の身体をきれいにし、十分に排泄させるものだった。[...] 夕方、私は王に浣腸をほどこした。しかしそれは大便とひとさじの尿を排出しただけであった<sup>(47)</sup>。

王は侍医団に見守られながら、休憩を挟みつつ、入浴を慎重におこなった。しかし、侍医団の努力に反して、王は体調を崩す。ただちに入浴は中止された。侍医は次のように記述している。

私は風呂を用意した。陛下は午前10時に入浴した。その後、まる1日、陛下はこれまでにない重い頭痛と、前日までとは一変してしまった体調で、お体のだるさが続いた。症状が大変悪いので入浴は中止。私はそれ以上、入浴に固執しようとは思わなかった<sup>(48)</sup>。

ルイ14世はその後まったく入浴をしなかったわけではない。1665年8月にも、やはり侍医の勧めで健康増進のための入浴をおこなっている。7日から17日まで連日行い、計20回ほど入浴した。このときは成功したものの、王は入浴に対して消極的であった。入浴をすると必ず体調を崩してしまうからであった。

王は、この唯一の機会をのぞいて、以後決して寝室での入浴をなさろうとはしなかった<sup>(49)</sup>。

王族の入浴事情でさえ、この通りであった。王以下の人びとの身体衛生に関しては推して知るべしである。

そして、次のような記述もあるように、入浴自体ができるだけ避けるべきものとして考えられていたのも事実なのである。

医学的な理由でやむをえない場合を除けば、入浴は人体にとって無駄であるばかりか、非常に有害なものである<sup>(50)</sup>。

引用文は当時の識者による見解であるから、これが17世紀の入浴に関する「正しい」見方であった。

## 8. 医学的見地からの白い下着の着替え

したがって、清潔において、もっとも重視されたのが、下着の取替えである。下着を取り換えることで、身体の清潔は保たれた。

清潔になるために下着を取り替えるという記述は、当時の文献には数多く見受けられる。第一にそれは健康のためであった。つまり、医学的見地から下着の取り替えが推奨されることがあった。たとえば、医師のティソ Samuel Auguste André David Tissot (1728-97) によれば、悪性の高熱にかかったときの処置がそうであった。

下着を2日おきに着替えるべきである<sup>60</sup>。

また疥癬の処置でも以下のように指示されている。

しばしば下着を取り替えるべきであるが、上に着ている衣服を替えるのは避けるべきだ。というのは、感染している衣服は、快復したあとにそれを身につけると、着た者にまた疥癬をもたらしてしまうからだ。《身につける前に、シュミーズとキュロットと靴下に硫黄をたきつけること。この薫蒸は必ず屋外で行なうこと。》<sup>62</sup>

このようにまず医学的な観点から下着の取替えが勧められた。これはまさに当時の先端の衛生観念であり、医療行為であると言ってよいだろう。

また、ルイ14世の生活を克明に記録したダンジョー Marquis de Dangeau (1638-1720) の日記によれば、1686年2月21日木曜日、体調を崩していたルイ14世は一日中ヴェルサイユ宮殿の居間のベッドで過ごしていたが、下着だけは取り替えていた。

彼は唯一下着を取り替えるためにのみ夕方起き上がった<sup>63</sup>。

## 9. 奢侈と見なされる着替え

このような医学的措置や健康への配慮としてだけでなく、下着の着替えはある種の贅沢や奢

侈と関わる事柄としても捉えられていた。

たとえば、ビュッシー・ラビュタンの『回想録』に次のような記述がある。以下は、彼がある伯爵夫人の家に滞在したときに受けた歓待の様子である。

不便がないわけではなかった。というのは、私たちには着替える下着もなかったし、私たちに仕えてくれる下僕もいなかったからである。伯爵夫人は彼女の家で私が退屈するような最も些細な原因さえつくりたくなかったので、衣服を脱いだり着たりするための小姓をひとりと、彼女の夫のシュミーズを数枚と替え襟をいくつかを私に手渡した。私たちを非常に豪華さと清潔さで歓待してくれたのである<sup>54</sup>。

着替えの下着が提供されたことで、ラビュタンはすばらしいもてなしを受けたと理解している。清潔を保つことができるからである。着替える下着の欠如は、もっとも不快なことであった。とはいえ、これが非常に贅沢なもてなしであると見なされているのだから、多くの場合、着替えが用意されることなどなかったのだろう。

同様の事例はほかにもある。ブルゴーニュ公の家庭教師を勤め、アカデミー・フランセーズの会員で後にカンブレイの大司教にもなったフェヌロン François de Salignac de la Mothe Fénelon (1651-1715) の小説『テレマックの冒険』(1699)において、テレマックが女神カリプソに歓待された時の様子は次のようであった。

—ごゆるりとなさいませ。お召し物が濡れておりますこと。さあ、お着替えをあそばして。

[…]

こういって終わると、女神は、テレマックとマントールを、自分の居間に続く、岩屋で一番奥まった人目につかない部屋に案内した。そこには、ニンフたちの心づくしで、香柏(セードル)の大きな松明に赤々と火がともされており、その芳香があたり一面にただよっていた。そればかりではなく、新しい賓客(まろうど)のために衣服が用意されていた。

テレマックは、上質の羊毛製で、雪より白い下着と、金で刺繍された緋の衣を見たとき、こういう奢侈を前にすると若者の心にふつう起こりがちな快感を覚えた<sup>55</sup>。

この場面のすぐあとに、すばらしい食事が供されている。テレマックに差し出された下着はシュミーズではなく、羊毛のチュニックであるが、雪より白い美しいものであったので、彼は清潔なものとして受け止めたのである。そしてそれは身体に心地良い感覚をもたらす贅沢なものでもあった。

白さの際立った下着を取り替えることは、健康を維持するものであり、同時に贅沢な行為でも

あった。それこそが17世紀における清潔のイメージである。ヴィガレロの言うように、白い下着の取り替えは、清潔を実現し、身体を清浄にし、身体に快感を与えられていた。

このような当時の観念を裏付けるものとして、シャルル・ペロー Charles Perrault (1628-1703)の次の文章がある。水を使わずに下着によって清潔を保つ当時の習慣を、彼は誇らしげに礼賛する。風呂に入る習慣をもった古代人と同時代人とを比較して、17世紀のほうが優れているという論旨である。

たしかにわれわれは大きな浴槽を作ろうとしない。しかし、我われの下着が清潔であること、そして下着をあふれるほどに持っていること、それは常に我慢のならない入浴から我われを解放し、世界中のすべての風呂に匹敵する価値があるのだ<sup>56</sup>。

白い下着つまり清潔な下着を着替えることができること、そしてそれをふんだんに所有していることが、入浴以上に清潔な状態をつくと信じられていた。ペローのこの一文は17世紀の清潔観がいかなるものであったか、明確に示している。

## 10. 医療目的の入浴から気晴らしとしての入浴へ

18世紀になると17世紀においては禁忌であった水が清潔さの問題に徐々に介入し始める。特に上層階級の人々の間では、純粹に身体を洗うことだけが目的ではないにしても、入浴の習慣が生まれてくるのであった<sup>57</sup>。

入浴は、まず第一に、17世紀から引き続き、医療行為として行なわれていた。先に引用したテイソンの1761年の医学書では、さまざまな疾患に対し、しばしば水浴を医療行為として施していたことが窺える<sup>58</sup>。よく行なわれたのは足湯であった。旅人が脚の疲れを癒すために行なうのはもちろん<sup>59</sup>、胸部の炎症の際<sup>60</sup>、歯が痛いとき<sup>61</sup>、日射病のとき<sup>62</sup>、疱疹<sup>63</sup>、麻疹<sup>64</sup>、丹毒<sup>65</sup>、ひどい恐怖感のあと<sup>66</sup>、感染症<sup>67</sup>などさまざまな疾病および身体の不調の治療に、足湯が効果的であることが記されている。多くの場合、それはぬるま湯で行なった。全身浴もおこなわれた。17世紀には、ルイ14世が医師の指示に基づいて試みていたし、ルイ14世の王太子がしばしば健康増進のために川で水浴をしていたことをダンジョー侯爵は日記に綴っている。このような行為は宮廷の中でも王太子くらいしか行っておらず、非常な好奇心を持ってそのことが記録されている。たとえば、以下は、1684年6月の日記の記述である。

19日月曜日、王太子殿下は川で水浴を始めた。

22日木曜日、王太子殿下は川での水浴をまだ続けている。

## 17、18世紀フランスにおける奢侈と医療行為としての清潔

24 日土曜日、王太子殿下の風呂は続く。

25 日日曜日、王太子殿下は水浴を続けている。

26 日月曜日、王太子殿下は水浴を続けている。

29 日木曜日、王太子殿下は水浴を続けている<sup>68)</sup>。

このように特記すべきこととして、珍しいものを見るかのようにダンジョー侯爵は王太子の水浴について記録を続けた。王太子はもっぱら健康の維持、あるいは体調不良を改善するための措置として行っていた。

17世紀には王族の間でさえ珍しかった入浴であるが、18世紀には一般化してくる。例えば、ルソー Jean-Jacques Rousseau (1712-78) が『エミール』の中で、次のように述べていることから窺える。

子どもの体をときどき洗ってやるがいい。子どもの不潔な体はそうする必要があることを示している。拭くだけにしていると皮膚を傷める。しかし、子どもが強くなるにつれてしだいに湯の温度を下げたいて、しまいには夏でも冬でも冷たい水で洗うがいい。凍った水でもかまわない。危険のないように、水の温度は長い期間にすこしずつ目立たないように下げる必要があるから、正確にはかるために温度計をもちいとよい。この水浴の習慣は、いちど決められたら、その後、中断すべきではないし、一生保ち続ける必要がある。わたしは、清潔とか現在の健康とかの面からのみそう考えているのではなく、それは、筋肉に柔軟性をあたえ、さまざまな程度の暑さにも寒さにも、なんの努力もせず、なんの危険もなしに適応できるようにするのに有効なやり方だとも考えている<sup>69)</sup>。

ここには、あれほど水を忌避し、めったに水で体を洗わなかったルイ13世の時代と比べ、非常に大きな変化が見られる。18世紀になると、明らかに健康増進、体力増強の手段として水浴が位置づけられ、それが子どもの正常な発育を促すことになると考えられるようになったのであった。これは身体観の変化も手伝っているであろう。啓蒙の時代における確実な医学知識の広まりによって、身体は水に対して脆弱であるという認識が改められたのではないか。

もうひとつの変化は、優雅な気晴らし、つまり新しい快樂の習慣として入浴が定着したことである。『百科全書』を見ると、18世紀のパリのセーヌ河には、かつら屋兼風呂屋であったポワトゥヴァン Poitevin (生没年不詳) が1761年に設営した浴場船(図2)が浮かんでいた。これは最初の入浴施設だが、パリ大学医学部のお墨付きをもらった一種の温水治療施設としての性格をもっていた。入浴料は3リーブルで、当時の職人の日給が半リーブルであったことを考えると、贅沢な施設であったと言えるだろう<sup>70)</sup>。また、貴族たちは自分の邸宅の一室にまるでソファのような浴

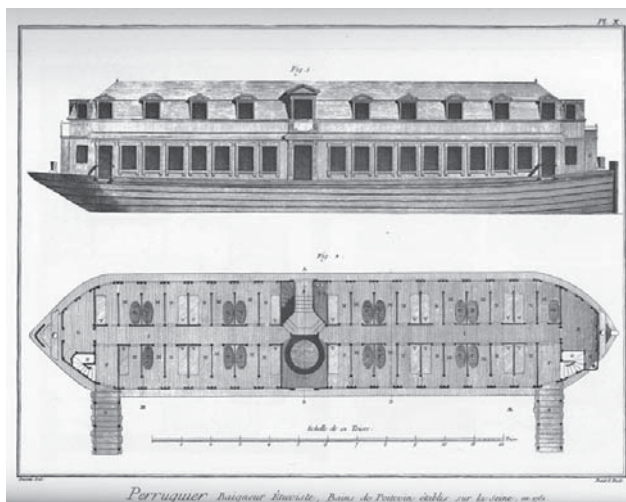


図2. ポワトゥバンの浴場船

DIDEROT & D'ALEMBERT, *Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, Paris, 1751-1780, (Friederich Frommann Verlag, Stuttgart, 1966) より。

槽を置いて、身体を洗う目的でなく、贅沢で優雅な新しい生活習慣として入浴を行なうようになっていた。

しかし、入浴はあくまで贅沢なことであり、大多数の人々には縁遠い事であった。したがって多くの人々の間では18世紀になっても、まだ17世紀的な清潔観、つまり白い下着を身につけ、それを時々洗濯して着替えればよいという清潔観が生きていたと考えるのが妥当である。しかも入浴できる裕福な人々も仕上げに白い下着を身につけることで、自身の清潔の表象を完成させていたはずである。それは18世紀の作法書が相変わらず白い下着の着用を奨励し続けていることから十分推察できる。たとえば、17世紀から18世紀にかけての礼儀作法書ブームの中で、ひととき多くの読者を得ていたアントワヌ・ド・クルタンの作法書を見ればよくわかる。クルタンは、清潔 (propreté) について意見を述べる中で、17世紀の初版から18世紀後半に至るまで、変わらず「白い下着を身につけていれば、贅沢に着飾っているかどうかは問題ではない<sup>7)</sup>」と言いつけているのである。

したがって18世紀においても清潔の表象に白い下着は不可欠であった。白い下着はそれ自体贅沢品であった。そして、むしろ下着の着用が本格的に広まりを見せ、それが清潔であることの前提になったのが18世紀であると考えられる。

## 11. 結論

17、18世紀において、白い下着類は清潔に不可欠なものであった。それは、第一に、身体衛生、



## 17、18世紀フランスにおける奢侈と医療行為としての清潔

とりわけ医学的見地から、施療目的で推奨されていた。第二に、白い下着の着替えがあることは、豊かで贅沢なことと考えられていた。

18世紀になって水に対する恐怖感が薄れ、入浴が健康増進および医療目的で行なわれるようになり、同時に贅沢な新しい生活習慣にもなっていた。この変化の背景には、おそらく身体観の大きな変容が存在し、水によって肉体が鍛えられるという新たな知識の誕生も窺うことができる。

白い下着が清潔と結び付けられた経緯には、水への恐怖感が色濃く見られる。アンシャン・レジーム期を通して、一貫して清潔のシンボルであり続けた白い下着は、奢侈と身体衛生と医療行為の融合した表象であり、その意味の変遷は、入浴に対する意識の変化、つまり水に対する意識の変化と密接に関わっているのである。

付記：本論は2010年8月23日から25日に韓国ソウル市で開催された第24回国際服飾学会議のポスター展示発表「Physical Hygiene as a Luxury in 17th and 18th Century France- The Significance of White Undergarments and Bathing」をもとに大幅な加筆修正を施したものである。

### 注

- (1) 筆者はこれまで清潔論について継続的に研究をおこなってきた。拙稿、「ギャラントリー——十七世紀前期フランスの社交生活と服飾——『服飾美学』第24号、1995年。拙稿「下着の色と清潔——十八世紀リヨンの遺体調書に見られる事例から——、『服飾美学』第30号、2000年。拙稿「18世紀パリ、リヨン、ボジョレにおける chemise の着用状況——清潔論再考——『実践女子短期大学紀要』第29号、2008年。拙稿「身分表象としての奢侈と清潔——<sup>フロブルデ</sup>17世紀フランスの白いリネン類 (linge) ——『服飾文化学会誌』Vol.10、2010年。拙稿「18世紀フランスにおける漂白・洗濯技法——白いリネン類流行の舞台裏——『日本家政学会誌』No.5, Vol.61、2010年5月。
- (2) Claude Favre de Vaugelas, *Remarque sur la Langue Française*, (1647), réédité par J. Streicher, Slatkine Reprints, Genève, 1970, p.5. «*Propriété* est bon pour signifier le *proprietas* des latins; mais il ne vaut rien pour dire, *le soin que l'on a de la netteté, de bien-séance, ou de l'ornement en ce qui regarde les habits, les meubles, ou quelque autre chose que ce soit.* Il faut appeler cela *propreté*, & non pas *propriété*.» (綴りと斜体は原史料のまま。以下同様。訳文は筆者による。以下とくにことわっていないものは同様。)
- (3) *Ibid.*, pp.5-6. 原文では「きれい、汚れのない」は net、「ふさわしい」は convenable、「礼儀正しい」は bienséance である。
- (4) Alfred Franklin, *La civilité, l'étiquette, la mode, le bon ton du XIIIe au XIX siècle*, 2tomes, Émile-Paul, Éditeur, Paris, 1908, pp.1-60. 本書の内容は以下の通り。第1巻、第1章：清潔、1. 13～17世紀、2. 17～19世紀、第2章：社交界にて、1. 紳士(オネットム)、2. 訪問、3. モード、4. 帽子—挨拶、5. 手袋、

6. ハンカチーフ、7. 煙草、8. 手紙、9. 遊びと舞踏会、10. 教会での作法、11. 病気と医者、12. 葬式 - 喪服、第3章：食卓にて、1. 一般論、2. 料理の給仕に関する作法、3. 飲み物の給仕。第2巻、第4章：女性、1. 女性のおしゃれ、2. i. 香水、ii. 髪粉、iii. 白粉、iv. 付けほくろ、v. 付け毛と入れ歯、3. 髪型と靴、4. 結婚、出産、子どもの洗礼、5. マダム、マドモワゼル、第5章：エチケット、注釈（付録）主な作法書の抜粋。フラン克蘭はフランス最古の公共図書館であるパリのマザラン図書館（Bibliothèque Mazarine）の管理職を務め、コレージュ・ド・フランスで講義も行った歴史家である。
- (5) Alfred Franklin, *La vie privée d'autrefois, arts et métiers, modes, moeurs, usages des Parisiens du XIIIe au XVIIIe siècle, d'après des documents originaux ou inédits, L'Hygiène*, Librairie Plon, Paris, 1890.（フラン克蘭、高橋清徳訳『排出する都市パリ—泥・ごみ・汚臭と疫病の時代』悠書館、2007年）
- (6) Franklin, *La civilité...op.cit.*, p.3.
- (7) Augustin Cabanès, *Moeurs intimes du passé*, 1er et 2me séries, Albin Michel, Paris, 1922-24.
- (8) Paul Robert, *Le Grand Robert de la Langue Française, Dictionnaire Alphabétique et Analogique de la Langue Française*, 2me édition, entièrement revue et enrichie par Alain Rey, Le Robert, Paris, 1985, <hygiène> の項目参照。
- (9) George Vigarello, *Le propre et le sale: L'hygiène du corps depuis le Moyen âge*, Seuil, Paris, 1985（ジョルジュ・ヴィガレロ、見市雅俊監訳『清潔になる私—身体管理の文化誌』、同文館、1994年、pp.219-222）。
- (10) Balzac, *Traité de la vie élégante*, in *Pathologie de la vie sociale, in la Comédie humaine*, tome XII, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1981. バルザックによるこの短いエッセーは、はじめ1830年の『ラ・モード誌』において匿名で連載されたものであり、これをまとめてLibrairie nouvelleが出版した本の初版が1853年である。
- (11) Charles Sorel, *Les lois de la galanterie*, réédité par Ludovic Lalanne, in *Le Trésor des pièces rares ou inédites. -Extrait du Nouveau recueil des pièces les plus agréables de ce temps*, Paris, A. Aubry, 1855, pp.VI-VII. «Pour lui, l'élégance dépend aussi bien de l'esprit que de corps, tandis que son devancier ne s'est guère occupé que de la bête, comme dit X. de Maistre; mais il faut avouer qu'il l'a ornée depuis les pieds jusqu'à la tête. Il y a surtout, à la p.11, des conseils donnés par l'auteur du XVIIe siècle qui paraîtraient fort étranges aux élégants de notre époque: "L'on peut, dit-il, aller quelquefois chez les baigneurs pour avoir le corps net, et tous les jours l'on prendra la peine de se laver les mains avec le pain d'amende. Il faut aussi se faire laver le visage presque aussi souvent", etc., etc. On voit, d'après ces étranges préceptes, que les mères donnent seules aujourd'hui à leur petits enfants, [...].»
- (12) *Ibid.*, p.VII.
- (13) ノルベルト・エリアス、赤井慧爾・中村元保・吉田正勝訳『文明化の過程（上）—ヨーロッパ上流階層の風俗の変遷』、法政大学出版会、1977年、pp.273-371。

## 17、18 世紀フランスにおける奢侈と医療行為としての清潔

- (14) ヴィガレロ、前掲書。
- (15) Ned Rival, *Histoire anecdotique de la propreté et des soins corporals*, Jacque Grancher, Paris, 1986.
- (16) Nathalie Mikailoff, *Les manières de propreté, du moyen âge à nos jours*, Édition Mloine, Paris, 1990 はヴィガレロの成果に多くを依拠しており、そこにカバネス等の研究成果も加えて、これまでの衛生観念の歴史研究の成果を時代ごとに分けて整理したという点は評価できるが、特に目立った新しい視点は見られない。清潔論研究ではないが、衛生問題に関する研究成果として避けて通れないのは、Alain Corban, *Le Miasme et la Jonquille, L'odorat et l'imaginaire social 18e-19e siècles*, Édition Aubier-Montaigne, Paris, 1982. (山田登世子、鹿島茂訳『においの歴史：嗅覚と社会的想像力』、藤原書店、1990年)である。しかしこれは清潔 (propreté) を論じたのではなく、嗅覚という人間の感覚の歴史を分析したものであり、その中で結果として、都市において衛生的な環境が獲得されてきた過程が、劇的に論述されるものとなっている。清潔 (propreté) 論ではないが、清潔・衛生史の研究成果として無視できない。
- (17) Grand Larousse de la langue française, Librairie Larousse, Paris, 1976, «propre» の項目。Paul Robert, *Le Grand Robert de la langue française, Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française*, 2me édition par Alain Rey, Le Robert, Paris, 1985, «propre» の項目に «1090, lat. proprius» と記してある。
- (18) Edmond Huguet, *Dictionnaire de la langue Française du XVI siècle*, Didier, Paris, 1973, siècle, Didier, Paris, 1973, «propre» の項目。
- (19) Edmond Huguet, *Petit glossaire des classiques Français du dix-septième siècle*, Librairie Hachette, Paris, 1920, propre と propreté の項目。
- (20) Edmond Huguet, *op.cit.* および La Curne de Sainte-Palaye, *Dictionnaire historique de l'ancien langage François ou Glossaire de la langue Flançoise*, Georg Olms Verlag, Hildesheim, New York, 1972 においても propreté の意味に propriété が記されていて混同されている。
- (21) Nicolas Faret, *L'honnête homme ou l'art de plaire à la cour*, Paris, (1630), réédité par M. Magendie, Slatkine Reprints, Genève, 1970, pp.92-3.
- (22) おそらく、propreté をあえて日本語に訳すならば、「端正」という語がもっとも馴染むのだろう。広辞苑は「きちんとしていること。行儀や姿が整っていて、乱れたところがなく、立派であること」と定義しており、propreté 概念にかなり近い。しかし、propreté は、それ以上の広範な世界をもっているのである。
- (23) George Vigarello, *op.cit.*, (ヴィガレロ、前掲書)。当時の清潔観と白い下着の関係については以下も参照。Daniel Roche, *La culture des apparences, une histoire du vêtement XVIIe-XVIIIe siècle*, Fayard, Paris, 1989, chapitre VII, <L'invention du linge>, pp.149-176. B. Garnot, *La culture matérielle en France aux XVIe-XVIIe-XVIIIe siècles*, Ophrys, Paris, 1995, pp.125-132. G. デュビイ、M. ペロー監修、杉村和子、志賀亮一監訳『女の歴史3、16 - 18 世紀1』藤原書店、1995年。および、前掲拙稿すべて。
- (24) 宮崎揚弘、「十七世紀トゥルーズ市当局とベスト大流行」、帝京史学、第22号、2007年、pp.59-166 参照。宮崎揚弘『災害都市トゥルーズ—17 世紀フランスの地方名望家政治—』岩波書店、2009年。

- 25) ディーター・ジェットー『西洋医学史ハンドブック』山本俊一訳、朝倉書店、1996年。本書によれば、解剖学は14世紀頃から始まり、16世紀に大きな発展を遂げたものの、一般に人体構造に関する確実な知識が広まるのは18世紀を待たねばならない。
- 26) Erasme, Giovanni Della Casa, Nicolas Faret, Charles Sorel, Antoine de Courtin, Jean-Baptiste de la Salle などの主な作法書を参照。
- 27) Furetière, *op.cit.*, <linge> の項目。«Toile mise en œuvre, propre pour servir au mesnage, ou à la personne.» 「家事や人に用いるための布製品」。
- 28) *Ibid.* <linge> の項目。
- 29) A. Franklin, *Dictionnaire historique des arts, métiers et professions exercés dans Paris depuis le XIIIe siècle*, Marseille, Laffitte Reprints, 1987 (1905-06), tome 1, p.300, <empeseuse> の項目。
- 30) Nicolas Faret, *op.cit.*, p.93.
- 31) Jacque Savary des Bruslon, *Dictionnaire universel de commerce*, Paris, Jacques Estienne, 1723, tome2, pp.548-9. <linger, lingère> の項目。«Les marchadises que les Maitresses Lingères sont en droit de vendre, sont toutes sortes de toile de lin & de chanvre, comme Batiste, Linon, Cambray & Hollande, des canevas gros & fins, des treillis blancs & jaunes, des draps vieux & neufs, du fil blanc & jaune; le tout tant en gros qu'en détail: enfin généralement toutes sortes d'ouvrages de toiles & marchandises qui en sont faites & manufacturées, comme chemises, calleçons, rabas, chaussettes, chaussons & autre semblables.» A. Franklin, *Dictionnaire historique ...op.cit.*, t.2, p.437 でもこれが引用されている。
- 32) Franklin, *ibid.*, の lingère の項目による。Franklin の注には Delamare, t.1, p.125 によるとされているが、Delamare に該当箇所はない。
- 33) Savary, *op.cit.*, tome1, p.302. <Batiste> の項目。«Nom que l'on donne à une sorte de toile de lin, très-fine, & très-blanche, qui se fabrique à Valenciennes, Cambray, Arras, Bapaume, Vervins, Peronne, Saint-Quentin, Noyon, & autres endroits des Provinces de Hainault, Cambresis, Artois & Picardie. Il y a de trois sortes de Batistes; les unes claires, les autres moins claires, & les autres beaucoup plus fortes, qu'on appelle Batistes *Hollandées*, parce qu'elles approchent de la qualité des toiles de Hollande; étant, comme elles, très-serrées, & très-unies.» 「非常に繊細で、真白い、亜麻布の一種の名前である。これはヴァランシエンヌ、カンブレイ、アラス、バポウム、ヴェルヴァン、ブロンヌ、サン・カンタン、ノワイヨン、そのほかのエノー地方やカンブレジ地方や、アルトワ地方や、ピカルディー地方で作られている。パティスト布には3種類がある。ひとつは薄いもの、もうひとつはそれほど薄くないもの、もうひとつは非常に丈夫なものである。パティスト・オランダと呼ぶものは、オランダ亜麻布の品質に非常に近いものであり、これと同じように、非常に目の詰まった無地のものである。」亜麻布の中でも最高級品とされるオランダ亜麻布に近い高品質のフランス産亜麻布と言って良い。
- 34) *Ibid.*, tome2, p.551. <Linon ou Linomple> の項目。«Linon ou Linomple. On appelle ainsi une certaine

17、18 世紀フランスにおける奢侈と医療行為としての清潔

espece de toile de lin blanche, claire, déliée & très-fine qui se manufacture à Valenciennes, Cambrai, Arras, Bapaume, Vervins, Peronne, S.Quentin, Noyon, & autres lieux des Provinces de Hainault, Cambresis, Artois & Picardie. Il se fait de trois sortes de linons, les uns unis, les autres rayez & les autres mouchetez. [...] Les linons tant unis, rayez que mouchetez, sont propres à faire des garnitures de tête, des fichus ou mouchoirs de cou, des toilettes & autres choses semblables à l'usage des femmes. On se sert cependant des unis pour faire des surplis & rochets pour les Gens d'Eglise; même des cravates & des manchettes pour les hommes du monde.» 「リノン、またはリノンブル。ヴァランシエンヌ、カンブレイ、アラス、バポウム、ヴェルヴァン、プロンス、サン・カンタン、ノワイヨン、そしてそのほかのエノー地方やカンブレジ地方や、アルトワ地方や、ピカルディー地方で作られている、白くて、薄くて、繊細で、非常に上質な亜麻布のことをこのように呼ぶ。3種類のリノンが作られる。ひとつは無地のもの、もうひとつは縞模様、もうひとつは斑点のあるもの。[...] リノンは無地も縞も斑点模様も、頭部の装飾品や、フィッシュ（肩掛け）やネッカチーフや小さな布類（toilette）やほかの似たような女性が用いるものを作るのに適している。しかしながら、無地のものは、聖職者の祭服（スルプリ）や司教の着る短い白衣（ロシェ）に使われる。同様に上流社会の男性のクラヴァットやカフスにも用いられる。」

35) *Ibid.*, tome1, pp.532-33. <Cambrai ou Cambresine> の項目。«Cambrai ou Cambresine. C'est ainsi que l'on nomme une sorte de toile blanche, claire & fine, faire de lin; laquelle a quelque rapport pour la qualité aux quintins clairs & fins de Bretagne, quoique d'une qualité qui leur est de beaucoup supérieure. [...] Leur usage le plus ordinaire est pour faire des garnitures de tête pour les femmes, & des rabas & manchettes pour les hommes.» 「カンブレイ、またはカンブレジヌ。亜麻で作られた白くて薄くて繊細な布の一種をこのように呼ぶ。これはブルターニュ地方の薄くて上質のカンタン布（コート・ダルモル県の伝統的な布地）とのつながりがある。とは言え、それよりもずっと上質ではあるが。[...] これらは女性の頭部の装飾品や男性の襟飾り（ラバ）やカフスに非常によく用いられている。」

36) *Ibid.*, tome1, p.545-6. <Canevas> の項目。«Canevas. Toile écriuë très-claire, de chanvre, ou de lin. [...] Est aussi une grosse toile de chanvre écriuë, un peu claire, qui se fabrique dans le pays du Perche. [...] Est encore le nom que l'on donne à une espece de très-grosse toile de chanvre, écriuë, qui s'employe à faire des torchons.» 「カヌバス。非常に薄い麻か亜麻の布。[...] カヌバスはペルシュ地方で作られているすこし薄地の麻の粗布のことも言う。[...] カヌバスはまた非常に粗い麻布の一種に与えられた名前であり、これは布巾にもちいられている。」

37) *Ibid.*, tome2, p.548. <linger, lingère> の項目。

38) A. Franklin, *Dictionnaire historique...op.cit.*, tome2, p.437. <Lingères> の項目。

39) M.de Garsault, *L'Art de la Lingère*, De L'imprimerie de L. F. Delatour, 1771.

40) Madelaine Foisil (sous la direction de), *Journal de Jean Héroard*, Fayard, 1989, p.371. «Je luy fis laver tout le corps de vin vermeil meslé avec de l'huile, et la teste de pareil vin et de l'huile rosat.»

- (41) *Ibid.*, p.379.
- (42) *Ibid.*, p.379.
- (43) *Ibid.*
- (44) *Ibid.*, p.1085. «lavé les jambes c'est la première fois.»
- (45) *Ibid.*, p.1472.
- (46) ヴィガレロ、前掲書、pp.18-19.
- (47) Vallot, Daquin et Fagon, *Journal de santé de Louis XIV*, Jérôme Millon, Grenoble, 2004, p.137. «Je fis préparer son bouillon purgatif le dimanche matin pour le baigner le lendemain. Ce remède trouva le corps du roi si net et si évacué, [...] Sur le soir je donnai un lavement qui n'attira que de grosses matières, et pas une seule cuillerée d'urine.»
- (48) *Ibid.*, p.137. «Je fis préparer le bain; le roi y entra à dix heures, se trouva tout le reste de la journée appesanti, avec une douleur sourde de la tête qui ne lui était jamais arrivée, l'attitude de tout le corps en un changement notable de l'état où il était les jours précédents. Je ne voulu pas m'opiniâtrer au bain, ayant remarqué assez mauvaises circonstances pour le faire quitter au roi.»
- (49) *Ibid.*, p.156. «Le roi ne s'est jamais voulu accoutumer aux bains de la chambre qu'en cette seule occasion.»
- (50) *Recueil général des questions traitées és Conférences du Bureau d'Adresse, sur toute sortes de Matières; Par les plus beaux esprits de ce temps*, tome 2, I. Baptiste Loyson, Paris, 1655, p.533. «Que le bain, hors l'usage de la Médecine en une pressante nécessité, est non seulement superflu, mais très dommageable aux hommes.»
- (51) Samuel Auguste André David Tissot, *Avis au peuple sur sa santé*, (1761), Quai Voltaire/ Histoire, Paris, 1993, p.183. «L'on doit changer de linge tous les deux jours.»
- (52) *Ibid.*, p.239. «Il faut aussi changer souvent de linges, mais il faut éviter de changer d'habits; parce que les habits s'infectant, ceux qu'on a portés pourraient redonner la gale, quand on les reprendrait après être guéri. "Il faut parfumer de soufre les chemises, culottes, bas, avant qu'on les mette; mais cette fumigation doit se faire en plein air."»
- (53) *Journal du marquis de Dangeau*, tome II, 1686-1687, Paleo, Paris, 2002, p.31. Jeudi 21 février, à Versailles, «il se leva le soir seulement pour changer de linge».
- (54) Bussy Rabutin, *Mémoires*, *op. cit.*, p.39. «ce n'était pas sans incommodité, car nous n'avions ni linge pour changer, ni valets pour nous servir. La Comtesse qui ne voulait pas me donner le moindre sujet de m'ennuyer chez elle, me donnait un de ses pages pour m'habiller et me déshabiller, des chemises et des collets de son mari; on nous faisait la plus grande chère du monde avec le plus de magnificence et de propreté.»

17、18 世紀フランスにおける奢侈と医療行為としての清潔

- (55) Fénelon, *Les Aventures de Télémaque*, 1699, (Librairie Hachette, Paris, 1927), pp.15-17. «Reposez-vous; vos habits sont mouillés, il est temps que vous en changiez» [...] En même temps elle fit entrer avec Mentor dans le lieu le plus secret et le plus reculé d'une grotte voisine de velle où la déesse demuroit. Les nymphes avoient en soin d'allumer en ce lieu un grand feu de bois de cèdre, dont la bonne odeur se répandoit de tous côtés, et elles y avoient laissé des habits pour les nouveaux hôtes. Télémaque, voyant qu'on lui avoit destiné une tunique d'une laine fine, don't la blancheur effaçoit celle de la neige, et une robe de pourpre avec broderie d'or, prit le plaisir qui est naturel à un jeune homme, en considérant cette magnificence.» (フェヌロン、朝倉剛訳『テレマックの冒険 (上)』、現代思潮社、1969年、p.9。)
- (56) Charles Perrault, *Parallèle des anciens et des modernes en ce qui regarde les arts et les sciences dialogues avec le poème du siècle de Louis Le Grand et une épître en vers sur le génie*, seconde édition, tomes 1, (1692), Slatkine Reprints, Genève, 1979, pp.80-81. «Il ne tient aussi qu'à nous de faire de grands Bains, mais la propreté de nostre linge & l'abondance que nous avons, qui nous dispensent de la servitude insupportable de se baigner à tous momens, valent mieux que tous les bains du monde.»
- (57) ヴィガレロ、前掲書、pp.123-185、および B. Garnot, *op.cit.*, pp.127-128. を参照。
- (58) Tissot, *op.cit.*
- (59) *Ibid.*, p.60
- (60) *Ibid.*, p.85
- (61) *Ibid.*, p.124
- (62) *Ibid.*, p.135
- (63) *Ibid.*, p.161
- (64) *Ibid.*, p.169
- (65) *Ibid.*, p.199
- (66) *Ibid.*, p.335
- (67) *Ibid.*, p.361
- (68) Dangeau, *op.cit.*, pp.26-29. «Lundi 19. [...] Monseigneur commença à se baigner dans la rivière. [...] Jeudi 22. [...] Monseigneur continua à se baigner dans la rivière. [...] Samedi 24. [...] Le bain de Monseigneur continua. [...] Dimanche 25. Monseigneur continua à se baigner, [...] Lundi 26. Monseigneur continua de se baigner. [...] Jeudi 29. [...] Monseigneur continua de se baigner.»
- (69) Jean-Jacques Rousseau, *Émile ou de l'Éducation, Émile et Sophie, in Œuvres complètes, IV, Émile, Éducation-Morale-Botanique*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1969, pp.277-278. «Lavez souvent les enfans: leur malpropreté en montre le besoin, quand on ne fait que les essuyer on les déchire. Mais à mesure qu'ils se renforcent diminuez par degrés la tiedeur de l'eau jusqu'à ce qu'en fin vous les laviez été et hiver à l'eau froide et même glacée. Comme pour ne pas les exposer il importe que cette diminu-

tion soit lente, successive et insensible, on peut se servir du thermomètre pour la mesurer exactement. Cet usage du bain une fois établi ne doit plus être interrompu et il importe de le garder toute sa vie. Je le considère, non seulement du côté de la propreté et de la santé actuelle, mais aussi comme une précaution salubre pour rendre plus flexible la texture des fibres et les faire céder sans effort et sans risque aux divers degrés de chaleur et de froid.» (ルソー、今野一雄訳『エミール (上)』、岩波文庫、2008年、p.85.)

(70) ヴィガレロ、前掲書、pp.139-140。

(71) Antoine de Courtin, *Nouveau traité de la civilité, op.cit.*, pp.74-75. «surtout si on a du linge blanc, il n'importe pas que l'on soit richement vestu»